



anthology of tanka

31 / 84

nitamagou / satsuki hoshino / masato inami / hachi ooki / hisashige furui
samayoikurage / mai shirai / ayano iida / rittai kurosaki

$$[5+7+5+7+7=31]$$

1984 年生まれは今年、31 歳になります。

国道十七号線

一二玉号

意図的にくしゃみに混ぜるファック・ユーからから回る路駐自転車

歯茎から血を流しながら生きて行くあたしらみんな強いんだから

若者は商店街でギター弾き殴りたいなら殴るまでです

とりあえず汚い言葉使いたい本日快晴天蓋の青

吐き戻す猥雑ならば飲んでやる弧を描きつつ国道は揺れ

結末は自分で決める事にして大団円でいいんじゃないか

アボカドをぐちゃぐちゃ潰す永遠は翼なくても叶うと思う

夕闇にどこでも良いと言えぬまま冷たく火傷を作れた日々へ

nitamagou

画布をひろげて

星乃咲月

青すぎる写真のように丁寧にしまつてふいに破りだす恋

もう一度、いえもう二度と たんぽぽの黄色い海に犬を見おくる

焼きながら羽ばたくものを受け入れる瞳はまるで茶色い巣箱

いとおいしい気持ちのまままで銀色のフオークを桃に突き刺すときも

交差点を渡りきつたら打ち明ける真つ赤な嘘と真つ白な嘘

その深い緑が森であった日をしずかに語るスターボックス

どうしようもなく駆けてゆく橙の空にあふれる熱をはなして

黒塗りのポストにわたすラブレター夜には星が生まれるだろう

satsuki hoshino

一〇〇〇光年と二二三二五日

伊波真人

オリオンの由来を習い見上げれば眠れぬ夜のこころを巡る

飼い猫は耳の先までノミがいてかつてはあつたねこ座を思う

心にも風邪はあるから栄養を絶やさずにおいて、うお座の貴方

くちびるの縁から逸れた錠剤は星になったということにする

オリオンが西の空へと沈むころ君は子犬が飼いたいと言う

真冬でも真夏とおなじ温度持つ熱帯魚屋の屋根にふる雪

当たらない天気予報を宿しては町はいつでもあいまいな地図

masato inami

ケータイ宇宙論。

大木はち

四国って打とうとしたら死んじゃえと予測しているてのひらの声

十字架を切るように打つ三十一文字が君の宇宙に届くゆうぐれ

誰よりも愛していたねひこにやんのラインスタンプ愛していたね

コウモリと蛾に囲まれた街だけど三十一文字を届けたかった

サーティーワンアイスクリーム新店の写メを取らない君も嫌いだ

ミスチルの新曲さえもケータイで聴いてる今日はしあわせ、たぶん

ケータイが私か私がケータイか分からぬ今日も下着を脱いだ

液晶の中のふたりの行いは君がいないから一人でできない

下向いて歩く人しかいないけど百円玉は落ちていないよ

白鳥になった君にもこの歌を送るよ受信フォルダーを見て！

hachi ooki

うつろい

古井久茂

愉快げに「イヤね」の声に微笑みを浮かべた舟を滝へ走らせ

懐かしい秋田平野のポスターを貼るカイロさえふゆう蜚蜚いちごの一期

葉巻持つ右手の膿の黄緑の銀杏並木を足音が去る

飴色の冬木に風のなく森と呼ばれて上げる寝腫れた顔を

白真弓春の嵐に花びらも朽ち木の上の木菟ミミズクが飛ぶ

アカシアのクアオルトまで支路を行く末の苦勞を知らないフリで

雨降りの磯で涙を拭う子の帰りを松の枯れ枝を切る

参道の雀と袈裟のむらさきのきんか槿花が咲いて月が沈んで

hisashige furui

30をこえて

さまよいくらげ

30にして立つという言葉ありさまようことだけ覚えたなんとか

30は新たな踏み台ここからはどこまで飛んでいけますか、空

30で一度も恋をしていない男とたぶん思われている

30度繰り返したらいい加減上手くいく日が来てもいいのに

30のため息集う教室でわたしはしろいチョークであった

30じゃアイスクリームに足りなくて牛井をまたかきこんでいる

30の言葉があればこれからの気持ちを全部伝えられるか

samayoikurage

はこの中

白井舞

「この中で死んでいるかもしれないよ」覗ける家電に五万までは出す

社会じゃなくて胎内はここで死んでも手続きが何も無い

らしく見えるようマニキュアをやめた出来損ないの栗みたいな爪

使われるのはずっと先でも乳が張るプラスチックのスプーンを全部捨てる

私だった私ではない私が君を産む今は人間未満の君を

男の子なら蜂のはね女の子なら歯と名付けよう

せっかくだから優先席に座って対岸の笑う観覧車を見たりする

mai shirai

スプリング・オブ・ライフ

飯田彩乃

花びらは一枚ごとに離れゆきてすべてが春の読点になる

木香薔薇の配線は入り組みながらすべての花を灯してあたり

雨はくる 君とのあはひにあるおよそすべてを濡らしつつ雨は来る

さんずいのごとき飛沫を蹴散らして鳥が飛びたつ春の波濤を

瞬きのあひまに過ぎる百年のひかりのなかに光を忘れ

いつか終はるいつかは終はるその日まであなたの髪に花を預けて

そして春 頬紅を差しあつてゐる姉妹のやうにわらふ二人は

ayano iida

冬に

黒崎立体

これまでに出会ったなかでいちばんに親しい川があり会いに行く

空の色にもうまく心を開けずに手持ちの中のお厚いコート

いつ来てもきれいな水に置いていくきれいなままに置きたい記憶

汚されてはじめて分かるたましいの居場所、金魚の水は濁って

殴っても殴ってもゆめ霧雨が眼鏡ばかりをだめにしていく

崩壊をしているだけのことなのに「生きてる」なんて恥ずかしかった

ひかりのダンス 白い水面 どうせ死ぬ その前にあの川を泳ごう

rittai kurosaki

profile



1984.01 - 1984.06

二玉号（1月19日生まれ）

無一物に憧れています。

Twitter : @nitamagou

blog : <http://nitamagou-fireworks.blogspot.jp/>

星乃咲月（1月25日生まれ）

北海道生まれの北海道育ち。北海帽子部所属。

短歌にずっと片思いをしています。

らっこ歌会とその出会いに感謝、はぐ。

Twitter : @kirarauta

伊波真人（2月4日生まれ）

群馬県高崎市生まれ、埼玉県さいたま市育ち。「冬の星図」により、第59回角川短歌賞受賞。

人生で大切なことはすべて深夜ラジオと深夜アニメから学んだ。子供の頃の夢は、魚博士。

大木はち（4月21日生まれ）

愛媛県松山市で生まれる。うどん県高松在住男子。四国キャラバン歌会運営、塔短歌会所属。猫が好き。

古井久茂（6月24日生まれ）

個人サークル fulidom.com として文学フリマなどで短歌の発表や企画をすると共に、様々なジャンルの小説を書き続けている。

Twitter : @fulidom

1984.07 - 1984.12

さまよいくらげ（7月14日生まれ）

さまよいくらげ、時々篠田くらげです。

7月14日に生まれて以来、ずっとさまよっています。

時々短歌を詠んだり投稿したりします。

Twitter : @samayoikurage

白井舞（9月4日生まれ）

白井舞と申します。東京で暮らす会社員。ガルマン歌会とさまよえる歌人の会にお邪魔しています。

幽霊ちゃんという名前で活動していることもあります。

Twitter : @shlyMe

飯田彩乃（12月6日生まれ）

横浜生まれ

未来短歌会黒瀬欄

Twitter : @iida_ayano

黒崎立体（12月6日生まれ）

栃木県出身。Poe-Zine『CMYK』メンバー。平川綾真智さんとの2人誌『数をそろえる』発行人。

「かろうじてゆめみたいなくず」

Twitter : @kurosakirittai / @rittaipaper

web : <http://kazahana.main.jp/>

special thanks

『 3 1 』

北山あさひ、辻聡之、黒崎恵未、じゃこ、田丸まひる、龍翔、御糸さち、久真八志、山田航、しろいろ。

<http://p.booklog.jp/book/84261>

アンソロジー歌集『31/84』

発行日：2015/01/19

発行人：黒崎立体 kurosakiritai.210@gmail.com

掲載作品の著作権は各作者に帰属します。